

徂徠礼楽思想における学習論

陳貞竹（国立台北芸術大学）

徂徠は、儒学の詩書礼楽を「先王の教え」、「先王の道」とし、その学習が「君子／士（為政者）」の育成において重要な役割を果たすことを主張した。「且つ学の道は、倣倣を本と為す。…礼楽の教へ、左といへば則ち左、右といへば則ち右…必ず其の師の如くして、敢へて違ひて以て分たず。」（『徂徠集』二七卷「答屈景山」）と述べる徂徠において、学習は準則と模倣による習熟が本質契機をなす。こうした徂徠の学習論は、日本伝統の諸芸に広く見られる「型」の習得、即ち規範的な種々の作法・模範の習得を中心とする学習観に近いように思われる。先行研究において、徂徠の学習論と所謂芸道論・稽古論との類似が指摘されてきた所以である。

しかしこれまでの研究は印象論的に徂徠の学習論に芸道論・稽古論との近似性を指摘し、「稽古」や「修行」といった名で示される学習観の受容として徂徠の礼楽学習論を位置づけたに過ぎず、徂徠礼楽論が如何なる問題意識のもと展開され、またこれと相即的に如何なる学習論が立てられたかといった問題が十分に検討されてきたわけではない。この点を考えずして、徂徠の学習論と諸芸における学習観との関係をより精緻に捉えることはできないだろう。

学習についての徂徠の主張は、彼の朱熹批判と深く関わっている。「仁斎先生…その言や、意を以てその精微を論説する者なり。それ意を以てその精微を論説する者は、またこれをその臆に取る者なり。先王の道を尽くさんや。その人宋儒を譏れどもその轍を蹈み、聖人の言ふこと能はざる所の者を以て一言に瞭然たらしめんと欲す。これを均しくするにまた宋儒の遺のみ。」（『弁名』上、道 1）と述べる徂徠が、朱熹批判を通して問題にしたのは、言葉を以て「先王の道」を把握すること、即ち言語による知のあり方である。つまり、徂徠の礼楽論は、言語による知のあり方との対峙において展開されたのである。では、徂徠は、何ゆえ言語による知のあり方を批判し、また、それとの対峙において、どのような学習論を展開したのであろうか。

本発表は、まず徂徠自身の問題意識に即してその学習論に検討を加える。その上で、徂徠の学習論と諸芸の伝書に見られる学習観との共通点・相違点を指摘し、徂徠の世界観・人間観に即して徂徠学習論の特徴と性格を明らかにしたい。